

## 主の招きに応じて

サムエル記上16:1

マルコによる福音書1:16~20

主の呼びかけを私どもはどこで聞くのでしょうか。主日礼拝において、あるいは祈祷会においてまたある人は密室の祈りの内に主のみ声を聞くかもしれません。しかし主イエスが最初に弟子たちを招かれたのは、彼らの日常生活の中での出会いでありました。最初の弟子四人は皆漁師でありみな自分の仕事をしていました。最初の二人は網を打っていた折に、そして次の二人は網の手入れをしていたときでありました。主との出会いは向こうからやってきます。勿論この漁師たちが日ごろから自分の仕事に生きがいを感じておらず、何かもっと違う崇高なものを求めていたということもあったかもしれません。しかしそのような人は他にも多くいたことでしょう。イエス様がこの漁師たちの心境を考えて選ばれたのかどうかはわかりません。そして彼らが従ったのも、日ごろの思いがあったのかどうかもわかりません。しかしそのような心理的な動き以上に、主イエスとの出会いは大きかったのです。ただ出会って、目が合い、短い言葉をかけられただけです。説得力のある説教を聞いたわけではありません。また執拗に勧誘されたわけでもなかったのです。漁師たちは出会い、すぐに主イエス様に付き従ったのです。

主イエスと彼らの出会ったところはガリラヤ湖畔でした。この後にカファルナウムに行くことからガリラヤ湖の北の方だったに違いありません。ガリラヤ湖は山間の谷の底にあるような淡水の湖です。海拔もマイナス二百メートル以下です。少し縦長で大きさや形は日本の猪苗代湖に近いというのを聞いたことがあります。朝にシモンとアンデレは湖畔で投網をしていたのでしょうか。二人にイエス様は声をかけます。「わたしについてきなさい。人間をとる漁師にしよう。」たったこれだけの言葉です。それにいきなり「人間をとる漁師にしよう」という一方的な言葉はある面乱暴なニュアンスを感じさせるものであるかもしれません。しかしこれを聞いた二人は、二人共すぐに網を捨ててイエス様に従いました。漁師にとって網は生活の大事な道具です。それを惜しげもなく捨ててすぐに従ったのです。二人が躊躇したとか、網を惜しんだとかは記されていません。ただイエス様の声を聞いたらすぐにその通りにされたということです。また少し行くと、更に二人の漁師に出会います。ヤコブとヨハネです。二人は漁が終わって岸に帰って網の手入れをしていたのでしょうか。二人が網という生活の道具を大切にしていたのが分かります。仕事に真面目な漁師であったのでしょうか。しかしイエス様に声をかけられた二人は、またもやすぐに網も舟、さらに自分たちの父親と雇人も置き去りにして、イエス様について行ったのです。舟は網以上に高価なものです。

今から三十数年前に、ガリラヤ湖畔からイエス様の時代の舟が発掘され復元されたというビックな出来事がありました。今では湖畔にある博物館に展示されています。私も見ましたが、思ったよりは大きいのです。長さが8.2メートル、幅が2.3メートル、高さが1.2メートルだそうです。舟の長さはおおよそこの海老名教会の横の窓から窓まで、そして幅は前の壁から一番前の席まで位になります（昨夜測ってみました）。資料には5人くらいの組員が乗るようであったとありましたが、詰めれば十数人は乗れたことでしょう。きっとイエス様は12弟子とこのような舟でガリラヤ湖に漕ぎ出でたのかもしれないと想像しました。

しかし二人がそこしていったものは網や舟という道具だけではありません。雇人たちや父親も残して行ったのです。親を置き去りにしてイエス様に従ったのです。それもすぐにとあります。道徳的に言ったら×かもしれません。しかし神の必要に比べれば、人間の道徳や倫理では測れるものではないのです。彼らもイエス様の後について行きました。ここで気を付けたいのは、彼らが皆後について行くとあるだけです。何かを手伝ったり、協力したり役に立つように働くということは記されていません。ただ黙々とイエス様の後について行くだけだったのです。私もかつて少しですが職人の世界で仕事をしたことがありましたが、最初は親方のカバンをもって後について行くだけで、仕事に入るとその親方の仕事を見るだけです。勿論簡単な手伝いはしますが。とにかく親方の仕事を見てまねていくということです。私の経験から言って優れた親方はあまり口出ししないのです。ただ弟子

の仕事が終わったら直したりしますけど。まねるということが仕事を学ぶということかもしれません。

イエス様はこの四人に対して自分の後をついてきなさいと言われました。この後にはイエス様に出会い、癒された人で自分からついて行きますと言い出した者もおりますが、イエス様はそれを承知されませんでした。弟子の選びは主なる神様がなさるものです。自分が望んでもついて行けないものもありますし、逆に従うのを躊躇したり拒んでも結果的に従うことになったものもあります。預言者についても、モーセやエレミヤなどは神のお呼びにすぐにお応えることはしませんでした。結局従うことになります。またイザヤなどは神様が「誰を遣わそうか」という声に「わたしをお遣わしてください」と名乗り出て認められるケースもあります。いずれにしても最終的には神様が選んだ者が最後までその使命を全うするということでしょう。

イスラエルの王としてサウルの後にダビデを選ばれるのも主であります。ダビデは8人兄弟の末っ子の羊飼いでした。当時末っ子といえば長男に比べると価値のない者であり、更に羊の番をする仕事は軽んじられたものでした。しかし神様はそのような人間の目から見れば価値のないような者をイスラエルの王としてお選びになったのです。イエス様の弟子たちの選びも同じです。最初に選んだ弟子たちは皆漁師でした。学識のある者や身分の高いものではなかったのです。主なる神様の目に留まるのは人間の目ではわからないのです。私どもの社会の評価であったり、人間の価値観とは別の次元から神様はそこご自分の僕をお選びになるのです。

視点をもう少し広げればイスラエルというのも同じです。大国のアッシリアやエジプト、バビロニアなどではなく、弱小国のイスラエルを主は御自分の民をして選ばれました。今日ではエジプトは残っていますが、当時ほど繁栄してはいないし、アッシリアやバビロニアは滅んでしまいました。またユダヤを植民地としていたローマ帝国も滅びてしまったのです。しかしイスラエルは、今でも残っています。

神様は選ばれた者を導かれまた守ってくださいます。

職業を表す言葉はその国々でいろいろありますが、天職や召命という言葉は英語ではコーリングと言います。ドイツ語でもベルーフあるいはベルーフンクと言いますがそれらはどれも「呼ぶ」という言葉から生じています。つまり天職なり召命というのは、自分の思いや願いではなく、たとえそれがあっても、上からの呼びかけに応えるものであるということです。つまり神様からの呼びかけ、お招きに応え、聞き従うということです。わたしども一人一人にはそれぞれの神様からの呼びかけ、お招きがあります。私どもはそれを確かに聞くということです。自分の思いや願いが先行したりそれに捕らわれていると、さやかな声は聴けなくなってしまいます。主のみ声に聴き従うときに、神様は祝福をしてくださりその栄光を分け与えてくださいます。自分の思いどおりになる人生やしたいことができる人生が理想的で幸福かといえばそうとは言えないかもしれません。自分が引き受けなければならないことを、たとえ不本意であっても引き受けたりする（苦難の杯を飲むような）ことによって返って大きな恵みや気づきを与えられることがありますし、振り返ってみればそれが自分にとって良い歩みであり、豊かな人生だったと思われることでしょう。主のみ声を絶えず聴き、それに応えて従っていけば、神様は守り導き、祝福してくださることでしょう。